
猫じゃらし【三語即興文】

和波智淳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫じゃらし【三語即興文】

【Nコード】

N6550E

【作者名】

和波智淳

【あらすじ】

またもや30分の制限時間を1時間以上踏み越えた三語即興文です。お題は「発見」「野良猫」「精肉工場」。猫じゃらしそのものは登場しません。

夕暮れ迫る裏路地に猫の姿を発見したとたん、アルフは地面にしゃがみこんでにゃーにゃー言い始めた。野良猫は、初めは警戒したように目をまん丸くして見慣れぬ人影を見上げていたが、やがて相手を猫好きのカモと見て取ったのだらう、警戒心を見せながらも寄ってきて、尻尾を立てながらアルフに体をすりつけ始めた。

「……やはり、ケモノはケモノ同士か」

「何か言った？」

やむなく立ち止まったガッツが呟くと、すばやく周りをぐるぐる回る猫に少しでも多く触ろうとしているアルフが、機嫌を損ねたように見上げてきた。

「いや、相変わらず動物をなつけるのが上手いなと、そう言ったんだ」

ガッツが目をそらして路地脇の建物を見上げると、アルフは信用ならないという表情をしたが、何も言わずに猫を撫でるほうに注意を戻した。

「ところで、おまえは、ここが何の工場なのか知っているか？」

ガッツが訊いてきたので、アルフは猫に手を伸ばしながらやはり建物を見上げた。窓が少ない灰色の壁は、いかにも工場という格好だ。だが、目につくところには看板などの業種を推測させるものが見当たらない。

「……何なのさ」

諦めてアルフが問うと、ガッツは普段どおりの無表情を一切変えず、アルフのほうを見もせずに応えた。

「精肉工場だ」

「え」

アルフは全身の毛を逆立てて固まった。その恐怖を敏感に察したのか、猫もびくりとアルフから身を離す。精肉工場と、その路地裏

に生息する野良猫……ありえないと思っても、悪い方向に想像が膨らむではないか。

「……というのは嘘だがな」

「な、なんだ……」

アルフが露骨にほっとしたところで、ガッツは言葉を続けた。

「だが、似たような工場ではある」

「えっ！ 何なんだよさつきから。思わせぶりにしないではつきり言えって、はつきり！」

相変わらず言葉一つで面白いように苛立つアルフに、ガッツはやつとからかうのをやめてやる気になった。

「……要するに、擬人用の食糧を生産する工場だ。プラスチックリサイクル工場とも言うがな」

「な、なんだ……そーゆーことか……」

アルフもやつと落ち着いて工場を見上げた。

ヒューマノイド
擬人の身体を構成する疑似細胞の、主な構成材料は炭素系化合物だ。疑似細胞は、外界から摂取した物質を分解し、必要な元素だけを選び出して自らの複製を作り出す材料とするが、やはり必要な元素を多く含む物質のほうが都合がいい。ゆえに、人間には消化不可能な高分子有機化合物　プラスチックも、擬人にとっては有益な食料となる。それを考えれば、廃プラスチックを集めて擬人の食料として製品化する工場があってもおかしくなかった。

「だからここが何だか知ってたんだな、お前？」

「ああ。俺が買った食料の外装に製造元が書いてあった。この住所だった」

「なーるほどな……」

ガッツも擬人である以上、ときどき擬人用の食料の世話になる。別に人間用の食料でも構わないし、当然そちらのほうが美味でもあるのだが、擬人用の食料のほうが格段に安いからだ。廃棄物利用なのだから当然といえば当然だが。

もつとも、ガッツたちに住処を提供しているアルフは、仮にも人

間と同じ姿をした存在がプラスチックをがつがつ食べる図にどうしても慣れないようで、何度見てもやめると言ってくる。だからガッツは最近では、擬人用の食料を食べる時は、アルフの目につかないところでこっそりやるようにしていた。

「さて、早く行かんと店が閉まるぞ。夏物がないと困るんじゃないかな。つたか、おまえは」

「えー」

ガッツが急かすと、アルフは不満そうな声を出した。アルフはやつと猫の頭を撫でることに成功して、今は何とかして喉を撫でようと悪戦苦闘しているところだった。手を出すたびに猫に警戒されるする避けられているその様は、はたから見ればひたすら猫に翻弄されているように見えなくもない。

しかし、早く商店街の模型屋に行つて目的の模型を手にしたいが、ガッツとしては、いつまでもここで猫と遊んでいられては困る。置いていく、という選択肢もなくはないが、擬人が人間の同伴者なしにうろつくこと、無用の警戒心を惹くこととなる。……ガッツは必殺の手を出すことにした。

「……商店街でペットフードを買ってくれば、帰りにまた猫を撫でることもできると思うが」

「わ！ 行く行く、行くよう！」

アルフが急いで立ち上がったので、猫がびっくりして飛びのいた。また後でなー、と猫に手を振るアルフを背後に引き連れて歩き出しながら、ガッツは思った。まあ、俺ならば絶対に動物よりも造形物に金を使うことを選ぶが、それは個人の自由というものだからな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6550e/>

猫じゃらし【三語即興文】

2010年10月15日23時14分発行